

# 十字軍によるトリポリ攻略

梅田輝世

## はじめに

中東における十字軍国家、いわゆるラテン4国は、第一次十字軍運動によって誕生した。当然のことながら4国それぞれに成立事情は様々であるが、その最後に成立したトリポリ伯領は、トリポリの港湾都市を前にした丘の上に、トゥールーズ伯レーモンが砦を築いた時から本格的に攻略戦が始まり、都市全域を征圧して名実共にトリポリ伯領が完成するまで7年もの歳月がかけられた。この間、トゥールーズ伯レーモン一族によりその事業が続けられたのである。トリポリ伯領自体は、1289年4月、マムルーク朝スルターン、カラウンによる占領まで、その末期には内紛を続けながらもとにかく、エデッサ伯領（1146年11月滅亡）やアンティオキア公領（1268年5月に滅亡）より長く存続する。そして1187年7月サラフ・アッディーンにエルサレムを追われ、その本拠地をアッカに移したエルサレム王国自体も、1291年5月スルターン・カラウンの子アル・アシュラフ・カリエルに征圧されて滅亡するのである。ここではトリポリ伯領がどのような形で成立したのか、ひいてはトリポリで三代にわたり自立した政権を維持したアンマール家がトリポリを追われる過程に焦点を合せ、十字軍時代初期の中東地域の一面をたどってみることにしたい。

## I トリポリ攻略まで

トゥールーズ伯レーモン4世 Raymond of St. Gilles は、1095年11月、教皇ウルバヌスII世によるクレルモンの会議後、急速にヨーロッパ中に広がる十字軍運動の波の中で最初に参加を表明した領邦君主で、十字軍諸侯中、最大の所領をもっていた。彼はすでにスペインでのレコンキスタ運動にも参加し、敬虔な信仰と武勇で名を駆けていた [Richard 1943; Hill & Hill 1962]。第一次十字軍諸侯の合流地となっていたコンスタンティノーブルには、1097年教皇特使のアデマール Adhémâr (ル・ピュイの司教) と同行し、レーモン伯の妻子と弟、それにプロヴァンス諸侯を率いての大連隊で到着した。コンスタンティノーブルに集結してくる十字軍諸侯たちに危機感を抱いたビザンツ皇帝アレキシウス Alexius I Comnenus は、諸侯たちに求めていた臣従礼 *homāge* をレーモン伯にも求めた。レーモン伯はこれを拒否したが、部下ともども今後とも皇帝の生命と名誉を尊重し、被害を与えるよ

うなことは一切しないと約束して<sup>1)</sup>、皇帝の信頼を得、この後親交を重ねることになった。そして実際、生涯を通じて事あるごとにこれを遵守しようと努めている。

1097年10月から始ったアンティオキア攻略戦中、98年8月に教皇特使のアデマールが疫病で死亡し、レーモン伯も一時病に伏したが、9月には回復して活動を再開した。長びくアンティオキア滞在にいらだち、聖地巡礼を早く果したいと望む巡礼者たちの熱意におされ、アンティオキアの所属をめぐるボヘムンド Bohemond of Tarentum との対立に一応の妥協をとりつけた後、1098年11月23日、残留を望んだ諸侯たちを残して、レーモン伯は十字軍本隊のリーダーとしてアンティオキアを出発した。彼はアンティオキアで発見された聖槍を護持し、十字軍諸侯たちとその一行、それに続く大量の一般巡礼者集団を率いてエルサレムまで進軍したのである。途中アルバラを占領し、さらに11月27日にはマアラットル・ヌウマーンに到着した。ここでの彼らの大虐殺行為と悲惨な情況は [Raymond: 76; Ibn al-Qalānishi: 35-36; Ibn al-Athir: 278-79]、噂となってまたたく間に広がり、周辺の住民はもとよりアラブやトルコの諸侯たちの間に大きな恐怖心を植えつけた。これが十字軍一行には幸いし、以降、近隣の諸侯たちからの贈物や糧食、馬匹などを提供され、案内役までつけられて進むことができた。全て領内を何とか無事に通過してもらいたいとの切なる願いからの行為である。オロンテス川沿いのシャイザル領を通過のときには、領主ムンキズ家が糧食を提供し、贈物をしてこの先十字軍に敵対しないことを約束している。ヒスン・アルアクラド（カルク・ド・シュバリエ）を掠奪してここに滞在していたときには、ハマのアミールやトリポリからの使者を迎えている。レーモン伯の従軍司祭として同行したアジュールのレーモン Raymond of Aguilers も

カメラの特使とトリポリ王の特使がこのときやって来て我らの勇敢さと強さを知り感銘をうけた。彼らはレーモン伯に一旦引きあげ再度訪問する許可を得た。しばらくして彼らは我らの使者と共に発ち、多くの贈物と馬を連れて戻って来た。我らが難攻不落の城塞を占領してきたので、領地を奪われるのではないかと恐れたためである。さらに在地

1) 1096年秋、コンスタンティノープルに最初に到着したヴェルマンドワ伯ユージュ Hugu de Vermandois は、アレキシウス帝から受けた歓待や贈物に満足して臣従礼を行ない、トルコ侵入前のビザンツ旧領土を十字軍が征服したとき、その地は皇帝に所属することを認めた。ユージュに続いて到着したゴドフロワと弟のボードワンらは、初め断りつづけたが食糧供給の停止など皇帝からの圧力で、1097年イースターに誠実義務を誓約している。アンナ・コムネナによると、タンクレードを除いて全員が臣従礼をしたという。ただアンティオキアへの進軍を前に再度臣従礼が求められたとき、彼も渋りながら従ったとある [Anna: 340-41]。レーモン伯の臣従礼拒否と、アレキシウス帝との親交の様子はアジュールのレーモンにも詳しい記述がある [Raymond: 24]。

アラブ語史書にも記述があり、イブヌル・アシールは「フランクがコンスタンティノープルに着くと、ローマの王は彼らが領内を通過するのを禁じた。そして予のためにアンティオキアを征服すると誓うまで、イスラムの国に渡さないと告げた」と記し、イブヌル・カラーニシーも「フランク人はローマの王と契約していて、彼らが占領した最初の町を王に引渡すと約束していた」と記している [Ibn al-Athir: 273; Ibn al-Qalānishi: 135]。

の住民たちはレーモン伯に贈物をし、糧食を提供し、賞讃の言葉を言った。そして彼らの町と城の安全を確保したのである。この幸運でトゥールーズ伯の名声は今までのリーダーも得られなかったほどすばらしいものになった [Raymond: 87]。

と記している。

さて、トリポリは古代フェニキアの港町であったときから良港としてよく知られていて、ローマ帝国の支配下で堅固な要砦をもつ港湾都市となっていた。635年アラブの支配下に入ったが、10世紀以降、ビザンツ帝国とファーティマ朝との抗争の的となっている。1047年2月、トリポリを訪れたナーシル・イ・ホスロー Nāsir-i Khosrau は

町の近郊全て畑、果樹園や木々におおわれている。砂糖キビがここでは豊かに育ち、同じくオレンジ、シトロンの木々またバナナ、レモン、ナツメヤシが豊かに実る。我々が到着のとき砂糖キビからジュースを搾出していた。……トリポリは三面が海に囲まれていて、波が打ちよせると海水は市城壁の所まで戻される。陸に通じる一面は、市城壁の東側にある堅固な壕によって守られている。これを越えると頑丈な鉄の門が閉ざされている。

と、トリポリ市の豊かさ、堅固に要砦化した町の様子を記している。さらに市内の住民2万人をもつ繁栄した都市内の建物、施設を細かく記し、ファーティマ朝スルタンの統治下にあり、住民はシーア派で、ビザンツとの聖戦ジハードに備えるため租税を免除されていると述べている [Nassiri Khosrau: 40-45]。

1055年、セルジューク・トルコ、トゥグリルベクのバグダード入城とこれに続くトルコ勢力のシリア侵出は、ビザンツ世界、そしてアッバース朝はもとよりファーティマ朝の状況を激変させた。エジプトでは、6代目カリフ、ハーキムの即位を機に表面化したベルベル人と東方派の対立に加え、7代目カリフ、アル・アジーズが新たに導入したトルコ兵とスーダン兵が加わり、ベルベル、スーダン、トルコ人部隊がそれぞれ互に勢力を競いあい、抗争が一段と激化していたが、これがシリア地域にも及び、自立化する都市が続出したのである<sup>2)</sup>。1070年、破竹の勢いでトルコ勢力侵入のなかで、ファーティマ朝のトリポリ統轄者ムフタール・アッダウラ Mukhtār al-Dawla b. Bazzāl が死亡したのを機に、ティレのカーディー Ibn Abī 'Āqil とトリポリのカーディー、アル・ハサン Amin al-Dawla Abū Ṭalib al-Ḥasan がファーティマ朝から独立する。先述のレーモン伯の下にやって来たトリポリからの使者は、3代目頭主になったばかりのファクル・アル・ムルク Fakhr al-Mulk Ibn 'Ammār が送った使者である。この使者につけて、通過の交渉のためレーモン伯が送ったフランクの使者は、トリポリの富と繁栄ぶりを伝えるとともに、彼らからの助言をうけた。

2) Bianqis, T. は『ファーティマ朝下のダマスカスとシリア』で、イブヌル・カラーニシーとマクリージーを主史料として比較検討し、この間の実情を詳述している [Bianqis: II, 279; Ibn al-Qalānishi: 44-5, 48-49, 112-13]。

ランシマンは、レーモン伯の部下によるトルトサとマラクレアの占拠はこうした助言に拠るものであったとしている [Runciman 1954: I, 308-42]。この後、レーモン伯はアンティオキアに残っていたゴドフロワ伯 Godfroi de Bouillon, ボヘムンド公等に書簡を送り、アルカでの合流を促した。これに応じた諸侯たちとアルカで再集結した後、十字軍一行はシリアの沿岸を南下し 1099 年 5 月いよいよトリポリ領内に入った。アジュールのレーモンは、トリポリの王から 1 万 5000 枚のディナール金貨、馬、ラバそれに多くの豪華な衣裳を送ってきたこと、他の多くの町からもあり余るほどの金や贈物が届けられたこと、キリスト教に改宗するムスリムもいたことなどを記し、さらにこのような状況のなかで、自分が十字軍のリーダーと記した書簡を持たせて、諸侯たちそれぞれがサラセン人の都市に送ったと、豊かさがもたらした諸侯たちの勝手な行動と反目ぶりを批難している [Raymond: 91]。

1099 年 6 月、十字軍諸侯はエルサレムを前に幕営した。聖市エルサレムの攻略は翌日から始まり、諸侯はそれぞれの持場についた。レーモン伯の隊は一旦市の西側に陣をおいたが、シオン山に移動し、7 月 13 日の総攻撃と 15 日の陥落のときには、エルサレム市のシタデル、ダビデの塔側を征服した。陥落時にくり広げられた悲惨な状況は、イブヌル・カラーニシー、イブヌル・アシールらアラブ語史書に詳述されているし、フランク側の記録にも多い。そのなかでもエデッサ伯に納まったボードワン Baldwin of Boulogne の従軍司祭をつとめたシャルトルのフルシェ Fulcher of Chartres は、現場に居合せなかったためか、同朋たちの野蛮な行為を憤慨して記している [Fulcher: 121-23; Ibn al-Qalānishi: 136; Ibn al-Athir: 283-84]。虐殺と掠奪が横行するなかで、レーモン伯だけがファーティマ朝のエルサレム駐留軍司令官イフティハール・アッダウラ Iftikhār al-Dawla とアマーン（安全保障）の協定を交し、これを履行して、ダビデの塔に逃げこんだイフティハール・アッダウラとその一行を無事ファーティマ朝支配下のアスカラーンに逃亡させたのである。

征服後のエルサレム統括者の選出が問題となったとき、先ずレーモン伯が候補にあがった。家柄、経歴の面で申分がなく、ビザンツ皇帝の知遇もえているし、教皇特使アデマールとも親しくしていた。何よりもエルサレムに至る十字軍の長い行進のなかで、常に指導的役割を果たしてきたし、特にアンティオキア出発後に常に聖槍を奉持し巡礼者として振舞い、信仰に厚く敬虔な人物とみなされていたからである。しかしエルサレムの代表にはゴドフロワ公が選ばれた。アジュールのレーモンによるとその理由は、諸侯の強い勧めを退け、エルサレムの王の名をもつなど恐ろしいことだと告げ、他の者がこれになることに敢えて邪魔だてしないと言ったからだという。ティレのウィリアム William of Tyre は、代表者選出のために集まった選挙人たちが、レーモン伯は帰国の意志が強く、王権を得る気など全くないと聞かされ、さらに代表者となるにはふさわしくない理由をでっちあげて話されたためだと記している。ランシマンは、彼がビザンツ皇帝と親しく常に皇帝側に立っていたので、反感をもつ部下たちからの抵抗をうけていたこと、自負心が強すぎ、仲間たちの人気は今ひとつ足りなかった点をあげ、これに対しゴドフロワの方は人気があり、きわめて無難な人選だったと判

断している。ただレーモン伯らがエルサレムを去った後、アデマールに代る教皇代理として9月にエルサレム入りしてエルサレム総主教に就任したダインベルト Daimbert に対しての、もと総主教アルヌルフ Arnulf の策動とアルヌルフと組んだエデッサ伯ボードワンの動きをみても、ポァーズやマイヤーの説くように何らかの策動があったようである [Raymond: 129-30; William: I, 383; Runciman 1969: 388-89; Boase 1971: 23; Mayer 1972: 61]。

レーモン伯は、念願の聖地巡礼をし、十字軍士としての誓約を果たして帰国するノルマンディー伯やフランダース伯などとともども聖地巡礼の務めをすませてエルサレムを発ち、ラタキアに向った。ラタキアはヌサイル山近く、トリポリより北にある港町で、すでにフランクの手に入っていて、レーモン伯はここに妻子を留めていたからである。そして1100年夏にはコンスタンティノープルに着きアレクシウス帝から歓迎され、厚遇されている。

1100年7月18日、エルサレムの“聖墓守護者”ゴドフロワが戦死し、弟のエデッサ伯ボードワンがエルサレム王として即位した。レーモン伯がコンスタンティノープルに滞在中のことである。この頃ヨーロッパでは1101年の十字軍が次々と結成されていた。エルサレム占領の報を聞くことなく亡くなった(1099年7月29日死亡)ウルバヌスⅡの後任で、ウルバヌスⅡと同様に十字軍運動に積極的な教皇パスカルⅡ Paschal Ⅱの働きかけで、1100年に成った十字軍である。確かに慢性化した人材不足を補い、十字軍国家を存続しつづけるためにも人材が必要とされていた。1101年の十字軍は先ずロンバルト隊、そしてフランス隊の結成がなった。フランス隊にはアンティオキア攻囲中に帰国してしまったブロワ伯ステファン Stephan of Blois それにアキテーヌ公でポアティエ伯のウィリアム William IX が加わっている。さらにブルグンド隊、ドイツ隊と続き、第一次十字軍のゴドフロワ隊とはほぼ同じ陸上のルートで1101年にはコンスタンティノープルに集ってきた。アレクシウス帝の皇女アンナ・コムネナによると、ロンバルト隊は折しもダニシュメント・トルコの手でポントス山脈のニクサルに捕囚されていたアンティオキア公ポヘムントを解放しようと困難な山岳ルートを計画していたので

皇帝はいく度も彼らの先人たちと同じ沿岸のコースをとり、エルサレムにいるラテン軍残留隊と合流するよう丁寧に助言した。彼らはフランクと合流するのを渋って聞き入れなかった。彼らは別のルートでコラッサン(ポントス)に直行したかったのである。皇帝はこの計画が実に大きな被害をもたらすのか知っていたが、彼らの軍が余りにも多くの経費を必要とするので(5万の騎兵と10万の歩兵がいた)気も進まず、説得も不可能となり、彼らが言う新しい策を試み、サン・ジル伯レーモンと Tzitas (将軍)を召喚して彼らに同行させた。彼らなら適切な助言を与え、愚かな遠征を押し留めることができたから…… [Anna: 356]

とある。結局シリアの事情に明るく、経験豊かなレーモン伯は、ロンバルト隊を率いて1101年7月にはアルメニア・テマ(軍管区)に入った。奇態でアンカラを奪ったが、一行はイルマック河を越えた所で、同じキリスト教徒として迎え入れた司祭や住民たちを虐殺し、

掠奪を重ねた。そしてその後ルーム・セルジュークのスルターン・キリジュ・アルスラーン Qilij Arslān とダニシュメント、オルトゥク家のガージー al-Malik al-Ghāzi Ibn 'Urduq の攻撃にあい、ほぼ全滅した。レーモン伯は数百人の騎馬が可能だった人たちともども辛うじて逃れ、1102年コンスタンティノーブルに帰還した [Fulcher: 164-68]。アンナ・コムネナによると先の記事に続けて

皇帝は彼らを迎え入れ、多額の金を与えて休息をとらせ、その後で希望する行先を尋ねた。彼らはエルサレムを選んだ。彼らの願はきき入れられ、装備品を満載した船で、大いなる寛大さをもって出発していった [Anna: 356]。

とある。

フランス隊、ドイツ隊など他の隊は第一次十字軍と同じ進路をとったが、カッパドキアのエレグリ近くで同じくほぼ全員、同じトルコ勢に一掃された。辛うじて逃げのびたレーモン伯は、一旦コンスタンティノーブルに戻り、ここからシリアに向けて発ち、彼の目標達成にかかる。

1102年、レーモン伯の再来で、トリポリは強い危機感をもち、即刻ダマスカスに援軍を求めた。先にジャバラの主権者でカーディーのイブン・スライハ Ibn Sulaiha からの依頼で、ダマスカスのアターベク・トゥグタキーン Tughtagīn Ḥāhir al-Dīn はジャバラを引受け、息子のタージ・アル・ムルク Tāj al-Mulk Būrī を送りこんでジャバラを統治させていたが、彼の専政に苦しんだジャバラの住民たちの訴えをトリポリのアンマール家がきき入れた。そしてジャバラに出兵して、住民たちと結び 1101年6月、彼ら勢力の追出しに成功したとき、アンマール家のファクル・アル・ムルクが捕えたタージ・アル・ムルクを丁重に扱い、ダマスカスに送り届け [Ibn al-Qalānīshī: 139]、ダマスカスとの協力関係が成立していたからである。1102年レーモン伯の到来に伴うアンマール家からの援助要請に、トゥグタキーンはヒムスの領主ジャーナー・アッダウラ Janā al-Dawla と共に出兵し、大勝したという。イブヌル、アシールの『完史』には、レーモン伯が率いた1101年の十字軍を紛砕したキリジュ・アルスラーンが、トゥグタキーンとファクル・アッディーン、レーモン伯の力が衰えたのを利用してはとの話をもちかけたのに、彼らが乗ってレーモン伯を攻撃したという記事がある [Ibn al-Athīr: 236-37]<sup>3)</sup>。ただこのときはレーモン伯に利があったようで、彼らと和平にもちこんだ後トルトサを攻撃にゆき、攻略に成功している。レーモン伯がジェノア艦隊の支援をえてトルトサを攻略したのは1102年2月のことであるから、シリアに戻るとすぐ行動を起し、トリポリ攻略にかかったことになる。この後すぐヒスン、アクラドを再び征圧し、1103年、トリポリ港湾都市に向きあった丘の上に砦を築く。要塞づくりにはアレクシウス帝の全面的な援助があり、皇帝の指示の下、キプロス公が送り届けた資材と人材

3) イブヌル・カラーニシーにも同記事がある [Ibn al-Qalānīshī: 143]。

を使って築かれた。またこの要塞づくりは巡礼者たちによって為されたので“巡礼者の丘”と呼ばれたという [William: I, 454]。

この要塞からレーモン伯はトリポリ市を連日悩まし続ける。これに対しアンマール家も必死に反撃した。イブヌル・カラーニシーは

AH 497 年……この年トリポリから報告があった。領主アンマール家ファクル・アル・ムルクは彼の軍隊と市の住民たちを率いてサンジル（レーモン伯）が町と向きあって建てた要塞に進軍し、（守備兵に）奇襲をかけた。そして守備兵を殺し、略奪して分捕品を得、荒しまわり、大量の武器、金、衣裳を得た。こうしてズル・ヒッジャ月 19 日トリポリに戻った。 [Ibn al-Qalānīshī: 146]

と記している。ファクル・アル・ムルクとレーモン伯、トリポリ市と要塞側との小ぜりあいには続き、緊張が高まるなか、ファクル・アル・ムルクはダマスカスやオルトック家のスクマーン Suqmān b. ‘Urtuq にも書簡を送り援軍を依頼したが、強力な援軍は得られなかった。エルサレム王ボードワン I は 1101 年 4 月アルスーフを、5 月にはカイサレアを占領し、1104 年 5 月には前年から攻略にかかっていたアッカをジェノア艦隊の援助をえて占領し、沿岸都市の征覇を目指して活躍し続けていたし、レーモン伯も 1104 年 4 月、再びジェノア艦隊と組んでジュバイルを攻略している。しかし、ジュバイルをジェノア側に譲り、トリポリに戻った後、1105 年 2 月 28 日、“巡礼者の丘”に建てた要塞で、レーモン伯は病死した。4 月になってアレppoのスルターン、リドワーン Ridwān b. Tutush が大軍を率いてトリポリに向ったが、これを知ったアンティオキアの摂政タンクレード Tancred がすぐ行動をおこし、リドワーンもこのすきにアンティオキア領に侵入する。結局アンマール家にとって効果はなかった。

## II トリポリ攻略

レーモン伯はトゥールーズに長男ベルトラム Bertram of St. Gilles を残し、留守をまかせて十字軍に参加した。彼の手元には次男のアルフォンソ Alfonso がいたが、この子供は“巡礼者の丘”の要塞で誕生した幼児で、後継にはならなかった。結局レーモン伯の母方の従兄弟で、彼と共に行動してきたセルダーニュ伯のウィリアム William Jordan を後継者とし、自らの軍を指揮し、トリポリ市の攻略を続けるとともに、自分が獲得した領土を全て継ぐように伝えた。遺言通りにウィリアムは、レーモン伯の遺志通り、精力的に攻囲を堅め、またアルカやその他近隣地域を占領していったのである。アンナ・コムネナは、レーモン伯の死とウィリアム・ヨルダンの相続を知ると、アレクシウス帝はキプロス公に命じて大量の金を届けさせ、ウィリアムにレーモン伯と同様、親交と誠実の誓いを求めたと記している<sup>4)</sup>。

4) アンナはウィリアム・ヨルダンをレーモン伯の甥と記している。またキプロス公はアレクシウス

ウィリアムによる激しい攻囲戦で苦境に陥ったファクル・アル・ムルクは、バグダードのスルターン、ムハンマド Muhammad b. Malik Shāh に苦境を訴えた。ムハンマドの下には同じくダマスカスのトゥグタキーンからも状況報告と援軍の要請がきた。事情を知ったスルターンは、彼の軍団のアミール・ジャワール・サカーワ Jawāl Saqāwa に命じ、トルコ兵の大軍を率いて立つようにし、またアミールのサダカ Sadaqa b. Mazyad とモースルの領主ジキルミシュ Jikirmish に書簡を送り、ジハード戦を行なうよう依頼した。彼らはスルターンの要請を不承無承引受けたものの、結局両者の不和でジハード戦は成立せずに終り、トリポリには役立たなかった。1107年ジキルミシュは倒れ、ジャワールがモースルの主となった。トルコ人アミール・ジャワールは捕囚中のエデッサ伯ボードワン Baldwin of Bourg (後のエルサレム王ボードワンII) を解放して彼と結び、アンティオキアのタンクレードと対立させた。フランク勢力の内部対立を利用しようと考えてのことである。

1108年3月、いよいよ追いつめられたファクル・アル・ムルクはダマスカスのアミールの一人であるアミール、アッラザーク 'Urtuq b. Abd al-Razzāq を通じて、トゥグタキーンに心情を訴えた。トゥグタキーンの許しを得て彼はバグダードへと旅立つ。イブヌル・カラニシーは

シヤバーン月、ファクル・アル・ムルクは500の騎兵と歩兵を伴い、バグダードを訪れたときスルターンに献上する多くの贈物、宝物を持って陸路トリポリを発った。

とその旅立ちから彼の一連の行動を詳述している [Ibn al-Qalānishi: 160-61]。これによると次のようになる。アミール、アッラザークの出迎えをうけ、ダマスカス市内に入ったファクル・アル・ムルクは、トゥグタキーンに敬意をもって厚遇され、彼と部下の指揮官たちは馬、ラクダその他多くの贈物を得た。旅立ちの前、ファクル・アル・ムルクは、彼の留守中の名代としておいた彼の従兄弟のアブル・マナーキブ Abu'l Manāqib と、軍の主要な士官で側近のグラームにトリポリ市を託し、6ヶ月分の給与をボーナスとして与えて忠誠を誓わせた。ところがアブル・マナーキブは彼を裏切ってファーティマ朝軍司令官アフダル al-Afḍar b. Amir al-Juyūsh につき、アフダルへの忠誠を誓った。これを知ったファクル・アル・ムルクはトリポリに残った士官たちに、アブル・マナーキブの逮捕と、アル・カソービ城での監禁を命じ、これが実行された。

この後1108年4月21日、ファクル・アル・ムルクは、トゥグタキーンの子タージ・アル・ムルクと共にダマスカスを旅立ち、バグダードに向ったが、それはトゥグタキーンがバグダードのスルターン宮廷内の裏事情を良く知っていて、スルターンとのつながりをうまくつけるためであった。またトゥグタキーン自身も息子に大量の贈物を持たせてやった。彼ら

↘ ス帝の指令通り、大金を持たせて使者を遣り、レーモン伯が生涯かけて友好的で誠実であったように、彼にも誠実の約束を求めたという [Anna: 357]。



はバグダードでスルターンに丁重にもてなされ、ファクル・アル・ムルクの願いを受けたスルターンは、大アミールたちにトリポリまで彼に同行し、彼を助けてフランク勢を一掃し、トリポリの危機を救うように告げた。ただこのときスルターンは軍隊は分散してモースルまで少しずつ進軍し、ジャワールからモースルを奪い、それからトリポリに行くよう指図したのである。ファクル・アル・ムルクは、バグダードでじらされ、やっと1108年8月末にダマスカスに戻ってきた。数日後、ファクル・アル・ムルクはダマスカス軍の騎兵分隊と自らの騎兵を伴ってジャバラに入り、住民からの歓迎と忠誠をうけた。ところがトリポリの住民たちは食糧危機と不安から、エジプトのアフダルに連絡し、食糧と必需品を満載した船に、市を統治する指揮官を乗せて送ってくれるよう申し出た。その要望に答えて、アフダルの名代、シャラフ・アッダウラ Sharaf al-Dawla b. Abū Tayyib は穀物を満載した船でトリポリに来ると、すぐ市を統轄しファクル・アル・ムルクの親派と士官たちを捕え、ファクル・アル・ムルクの所有物全てを奪ってこれらをエジプトに船で送った。ファーティマ朝から自立したトリポリが、再びファーティマ朝の手に入ったのである。

1109年3月の初、レーモン伯の長男ベルトラムが、父の正当な後継者として遺産の相続を求めて、4000もの大軍を率い70隻のジェノア艦隊で守られシリアに来た。彼は先ずアンティオキアの外港サン・シメオンに上陸し、第一次十字軍がアンティオキアを占領した後、レーモン伯とボレムンドとが交した協定をたてに、アンティオキア市内での父親の保留財産を求めた。アンティオキア公ボヘムンドが捕囚中も解放後も摂政としてアンティオキアを守り、ボヘムンドの帰国後アンティオキアを統治し、その領土を広げてきたタンクレードは当然これを拒否し、即刻立去るように命じた。ベルトラムは次にトルトサに向ったが、ここでもウィリアムに拒否された。レーモン伯の死後、遺言通りに4年間“巡礼者の丘”の要塞に住み、トリポリ攻略戦を繰り広げてきたウィリアムには譲れる道理がない。シャルトルのフルシェはこの両者の対立を、

ウィリアムは憎悪の念から攻囲を解いたが、ベルトラムは輩下の者と共に市を強固に包囲した。彼はウィリアムが成功して欲しいなどと思ったこともなかったし、ウィリアムもベルトラムが生きていて欲しくなかった。彼らは疑惑の故に争い、確信がえられなかった。彼らはこの世の利益のために争ったのであり、永遠に価値あることのためにではない。[Fulcher: 194]

と、彼らが十字軍士本来のあり方を見失ってしまったことを批難している。ウィリアムはタンクレードに助けを求め、ベルトラムはボードワン王に臣従礼をし、家臣になる約束の下で救援を求めた。エルサレム王ボードワンにとっては、タンクレードを押えこみ、トリポリを占領できる幸運な機会であり、タンクレードにとっても北シリアに力を広げる可能性が増すことになる。両者の対立のなかで、ボードワン王が調停にのりだした。ところが、この調停中にウィリアムが突然殺害されたのである。

シャルトルのフルシェは、

ある夜、乗馬中、伏兵の放った小さな矢に当たった。全員が犯人を探したが見出せなかった。ある者は悲しみに沈み、他の者は喜んだ。ある者は友を悼み、他の者は敵の死を喜んだ。ベルトラムはボードワン王の忠僕な家臣として納った。[Fulcher: 195]

と事故を見せかけた作爲的な殺人であったことを示唆している。ティレのウィリアムでは話し合いが行なわれている間に両家の従者たちの間で口論が起った。ウィリアム・ヨルダンはこれを仲裁しようと馬を駆して行つたが、偶然、矢に当たってこれがもとで死亡した。ある者たちは、伯ウィリアムがベルトラムの巧妙に仕組まれた工作で死亡したというが、未だに傷つけた犯人は判明していない。[William: I, 476]

となっている。イブヌル・カラーニシーは、ベルトラムをトリポリを最初に攻略したサン・ジルの子レイモンドと記し、ウィリアムは調停のとき自ら占領したアルカに戻っていた。ここで彼は畑にフランク人がいるのを見つけ、打とうとしたところ逆に打たれて殺された」と記している [Ibn al-Qalānīshī: 163]。

ともあれ対立する者の一方が消えたことで5月4日、トリポリ市への総攻撃が始った。海からはジェノア艦隊が、陸からはフランク連合隊が攻撃し、トリポリ市住民はエジプトからの援軍船の到着を頼りに待った。しかし援軍は到着しない。結局1109年7月12日、市はフランク勢に占領された。住民は捕えられ、女・子供は奴隷になり、全てが略奪された。慣例通り市の1/3はジェノアが、2/3はベルトラムが得る合意が成り、ここにトリポリ伯領が名実ともに成立し、ベルトラムがその初代領主となった。トリポリ伯領の名称はレーモン伯のときから使われていたが、十字軍ラテン4国の一つトリポリ伯領が正式に発足するのはこのときからである。分け前を得られなかったタンクレードは、その力でパニャースを占領し、さらにジャバラを得た。このときジャバラに居たアンマール家のファクル・アル・ムルクは町を脱出し、ジャイザルのムンキズ家に身を寄せている。そしてその後すぐ、ムンキズ家の頭主スルターンからの滞在の勤めを断り、ダマスカスに行き、ここでアターベク、トゥグタキーンから1109年8月市内に住居を与えられ、アッザブダーニという町とその近郊をイクター（封地）として与えられたという [Ibn al-Qalānīshī: 164]。

## おわりに

以上、トリポリがいかにしてトゥールーズ伯家のものになったのか、また伯領になったのか、さらに独立を続けたアンティオキア公と異なりトリポリ伯がエルサレム王の家臣となったのか、主にレーモン伯とトリポリとの関係に限ってみてきた。レーモン伯がなぜトリポリに的をしばったのか、またトリポリのアンマール家がいつ、どのような形でトリポリと係わり、主権を得たのか、またなぜそれが許されたのか、明らかにしなければならない点が多く残っている。これらは今後の課題である。

## 参考文献

- Anna : Anna Comnena, *The Alexiad*, tr. Sewter, E. R. A., Penguin Books, 1969.
- Fulcher : Fulcher de Chartres, *A History of the Expedition to Jerusalem*, tr. Ryan, R., ed. Fink, H., The Univ. of Tennessee Press, 1969, 1095 – 1127.
- Raymond : Raymond d'Aguilers, *Historia Francorum Qui Ceperunt Iherusalem*, tr. Hill, J. H. & L. L. Hill, Philadelphia, 1968.
- William : William (Archbishop of Tyre), *A History of Deeds Done beyond The Sea*, tr. Babcock, E. & A. C. Krey, 2 vols., Columbia Univ. Press, 1943.
- Ibn al-'Adīm : Kamāl ad-Dīn ibn al-'Adīm, *ẓubdat al-ḥalab fi tā'rikh Ḥalab*, ed. Dahan, S., 3 vols., Damas, 1951, 1968, vol. 2.
- Ibn al-Athīr : Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fi al-ta'rikh*, 13 vols., Beirut, 1982, vol. 10.
- Ibn Muyassar : Ibn Muyassar, *Akhbār Miṣr*, ed. Massé, M. H. Cairo, 1919.
- Ibn al-Qalānishī : Ibn al-Qalānishī, *Dhail Tā'likh Dimashq*, ed. Amedroz, H. F., Beirut, 1908.
- Ibn Zāfir : Ibn Zāfir, *Akhbār al-Duwal al-Munqaṭia*, ed. Ferré, A. Cairo, 1972.
- Nassiri Khosrau : Nassiri Khosrau, *Sefer Nameh*, ed. & tr. Schefer, C., Amsterdam, 1970.
- Usāma : Usāma b. Munqidh. 藤本勝次・池田 修・梅田輝世訳『回想録』関西大学出版部 1987年.
- Balard, M. (1993) Communes italiennes, Pauvoir et habitants des États Francs de Syrie-Palestine au XII siècle. In : Shatzmiller, M. (ed.) *Crusaders and Muslims in Twelfth Century Syria*. Leiden. 43 – 64.
- Bianqis, Th. (1986 – 1989) *Damas et la syrie sous la domination Fatimide*. 2 vols. Damas.
- Boase, T (1971) *Kingdoms and Strongholds of the Crusaders*. Indianapolis, N. Y.
- Brundage, J. A. (1993) The Legal Elite of the Crusader States. In : Shatzmiller, M. (ed.) *op. cit.*, 19 – 43.
- Hill J. H. & L. L. Hill (1962) *Raymond IV. Count of Toulouse*. Syracuse Univ. Press.
- Mayer, H. E. (1972) *The crusades*, tr. Gillingham, J. Oxford Univ. Press.
- Richard, J. (1945) *Le comté de Tripoli sous la dynastie Toulousane paris*. AMS Press. New York.
- Riley-Smith, J. (1987) *The Crusades : A Short History*. London.
- Riley-Smith, J. (1993) History, the Crusades and the Latin East, 1095 – 1204. In : Shatzmiller, M. (ed.) *op. cit.*, 1 – 17.
- Runciman, S. (1954) *A History of the Crusades*. 3 vols. Penguin Books.
- Runciman, S. (1969) The First Crusade. In : Setton 1969 – 89 : 280 – 308.
- Setton, K. M. (ed.) (1969 – 89) *A History of the Crusades*. 6 vols. The Univ. of Wisconsin Press, Vol. 1, 2.
- Smail, R. C. (1973) *The Crusaders in Syria and the Holy Land*. London.
- Wiet, G. (1960) 'Ammār. In : *EI*<sup>2</sup>, I – 448.